



町民文芸

只見短歌会

八月詠草

大塚栄一 指導

小倉キミ子

天候の良きも悪きも受け入れて人の営み途切れず続く

馬場 八智

罨さへも見分けて畑を荒しゆく狸に術なき夜が又来る

関谷登美子

猛暑なる日射しにそよぐコスモスに花啄みし小鳥下りくる

渡部ゆき子

男の孫の成人式に出で行くを幼日思ひ見送りて立つ

古川 英子

枝豆を茹でつつ流れる汗沁みて手術後の目のしばらく開けず

目黒 富子

豊作の期待はせねど出始めし稲穂の実入り願ひ畔刈る

五十嵐夏美

「荒城の月」の楽の音物悲し翁の葬りに自叙伝見つつ

渡部ヨリ子

雷の音を聞きつつ窓を閉め暑き厨で夕餉の仕度す

新国 洋子

熱きタオル幾度も替へて入院の肌拭きくれし娘帰りぬ

(出 詠 順)

只見俳句会

九月例会

目黒十一 指導

康 女

胃の中にスツと落ちゆく冷奴
だしぬけに鴉の鳴ける昼寢覚

リウコ

雨欲しき畑の日々や夏の葱

行事一つ終わり見回る草の畑

都

扇風機止まることなき夜更けかな

ラムネ飲み残るビー玉振ってみる

一 穂

送り盆木陰にそつと花の束

稲穂揃う朝のしじまや防除へり

敦 子

エプロンの胸ふくらと案山子かな

こうろぎや板間狭しと鳴き明す

礼

目薬をさして一日や夜の秋

夕空の視界広がる秋茜

修 一

いにしえを語る母にも残暑かな

池の水澄みて赤松映しけり

一 灯

どっかりと置かれ西瓜のみりと鳴く

朝涼し体操帰りの一年生

又壺歩

異常なしと医者に告げらる夏の雲
問診へ方言の出る大暑の日

邦 男

帰省子の家族に犬も仏の間

九十九のお婆の便り薄紅葉

恒 夫

峡に鳴る鳥獣おどし人を見ず

転作の札のひらめきそばの花

吉 児

新涼や和らぐ腹の縫目痕

風切り羽の羽搏き強く鶉巢立つ

隆 堂

新涼の畳の部屋に移りけり

実南天古民家守り米寿たり

邦 夫

毛見衆に女が一人カメラ持つ

蕎麦の花山ふところの一軒家

笑 羊

馬追の乗りて重たき電子辞書

ソムリエに耳を傾け新生姜

